岐阜市立女子短期大学研究紀要第 61 輯（平成 24 年 3 月）

現代に生きる *A Christmas Carol* の精神

The Spirit of *A Christmas Carol* Effective in our Times

吉田 恒義
Tsuneyoshi YOSHIDA

Abstract

A Christmas Carol is a story written in the middle of the nineteenth century by Charles Dickens. The leading character is an old miser named Scrooge. His nephew Fred is, unlike Scrooge, very friendly to everyone. Fred thinks that Christmas is a good time when people open their shut-up hearts freely and enjoy themselves. Words such as “kind,” “forgiving,” “charitable” and “pleasant” uttered by Fred produce the spirit of Christmas to which he is faithful.

Scrooge has been living his life in an extremely selfish way. He lacks the spirit of Christmas and annoys others around him. So, he is depicted critically in the story. In this essay, the present writer tried to make clear how effective the spirit of Christmas is in our times.

Keywords : スクルージ　クリスマスの精神　精霊　改心

１．はじめに

チャールズ･ディケンズ(Charles Dickens, 1812-1870)のクリスマスを題材とした物語集『クリスマス・ブックス』（*Christmas Books*, 1843-49)には５篇の作品が収められている。『クリスマス・キャロル』（*A Christmas Carol*, 1843)はそのうちの第１作目の作品で、クリスマス物の作品中で一番人気があるだけでなく、おそらくディケンズ作品の中でも最も人気のある作品の一つであると言えるであろう。ディケンズは『クリスマス・ブックス』以外にも多くのクリスマス物の作品を残しており、それらは『クリスマス・ストーリーズ』(*Christmas Stories*, 1859-67)と題する１巻本にまとめられている。このように数多くのクリスマス物を残したためにディケンズはクリスマスと関連付けて理解されることが多い。当然のことながら、クリスマス物の作品に関してはクリスマスと関連させることによって、より深く作品を理解することができるはずであり、さらにはディケンズの考えるクリスマスの精神に触れることができると言えよう。

『クリスマス・キャロル』に描かれているクリスマスの精神はどのようなものなのであろうか。また今日の我々にとってそのようなクリスマスの精神はいかなる意味を持っているのであろうか。小論ではこれらのことを考察してみたい。

２．物語の梗概

この物語の主人公は、ロンドン市内に事務所を構えるスクルージ(Scrooge)という強欲な人物で、金儲け一筋の商売をしている。クリスマスの前夜、自宅に帰ったスクルージの前にかつての仕事仲間で７年前に亡くなったマーレイ（Marley）の亡霊が、重い鎖を体に巻きつけた姿で現れる。マーレイの亡霊はスクルージに３人の幽霊がこれから現れるであろうと告げて姿を消す。その晩、スクルージの前に「過去のクリスマスの精霊」(The Ghost of Christmas Past)、「現在のクリスマスの精霊」(The Ghost of Christmas Present)、そして「未来のクリスマスの精霊」(The Ghost of Christmas Yet To Come)が現れる。

過去の精霊は少年時代と青年時代のスクルージの姿を見せ、すでに忘れられていた純真な気持ちを彼に思い起こさせる。現在の精霊は彼をロンドンの様々な場所に導き、彼が安い月給で雇っている出納係りのボブ・クラチット(Bob Cratchit)の家庭や、スクルージの甥フレッド(Fred)の家庭の様子などを見せる。ここでスクルージは、クラチット家の末っ子ティム坊や(Tiny Tim)がこの先はあまり長くは生きられないことを知る。あちこちを見て回った彼は、疲れ果てて深い眠りに落ちていく。

再び目覚めた時、スクルージの前に未来の精霊が現れ、あるクリスマスの日の情景を見せる。そこでは、多くの人々がある男性の死を心から喜び､お祝い気分で盛り上がっている。そうした状況の中、精霊が次に見せてくれたものは無残な男の死体から金目のものを盗んだりする浅ましい人間たちの様

子である。精霊は次に荒れ果てた墓場を見せる。スクルージは墓石に刻まれていたのは自分の名前であることを知る。恐怖と後悔の念で一杯になった彼は、精霊に対して心を必ず入れ替えることを約束して慈悲を乞い願う。翌日のクリスマスの朝、現実の世界に戻った彼は本来の人間性を取り戻し、クリスマスを心から祝うことのできる善良な人物に大変身する。

以上の梗概から明らかなように、スクルージは３人の精霊の訪問を契機として、これまでの自分の姿を後悔し改心するという点が作品の本質的な部分となっている。この点に関して Deborah A. Thomas は『クリスマス・キャロル』の本質を次のように的確に述べている。“. . . the essence of *A Christmas Carol* lies in the reeducation of Scrooge, a utilitarian businessman motivated solely by the desire for financial profit.”[1]

３．クリスマスの精神と無縁のスクルージ

物語の主人公スクルージは次のように描写されている。

> . . . . he was a tight-fisted hand at the grindstone, Scrooge! a squeezing, wrenching, grasping, scraping, clutching, covetous, old sinner! Hard and sharp as flint, from which no steel had ever struck out generous fire; secret, and self-contained, and solitary as an oyster. The cold within him froze his old features, nipped his pointed nose, shrivelled his cheek, stiffened his gait; made his eyes red, his thin lips blue; and spoke out shrewdly in his grating voice. A frosty rime was on his head, and on his eyebrows, and his wiry chin. He carried his own low temperature always about with him; he iced his office in the dog-days; and didn't thaw it one degree at Christmas. (Stave 1, p. 8)[2]

スクルージは高利貸しを営んでいる老守銭奴である。彼の強欲な性格は、「搾り取る」(squeezing)、「ねじり取る」(wrenching)、「つかんで離さない」(grasping)、「かき集める」(scraping)、「ふんだくる」(clutching)という貪欲さをあらわす意味を持つ動詞に“-ing”を付けた形容語を並べることによって表現されており、スクルージの強欲さが人の想像を絶するほどの異常なものであることが理解できる。さらにスクルージの性格は「火打ち石のように堅くて鋭い」(Hard and sharp as flint)、「秘密が多く、誰ともつき合おうとせず、かきのように孤独なのだ」(secret, and self-contained, and solitary as an oyster)という２つの比喩表現で描写されている。強欲で孤独[3]であるということがスクルージの際立った性格である。これらの性格に加えてスクルージは心の冷淡な人物でもある。このような性格のために、スクルージは周りの人々から敬遠されており、誰一人として彼を相手にする人はいない。

誰からも相手にされない孤独なスクルージを、彼の甥フレッドは気の毒に思っている。そこでフレッドは毎年クリスマスの時期になると、伯父のスクルージを食事に招待しようとするのであるが、スクルージは甥の招待をいつも断っている。スクルージはクリスマスをばかばかしいものであると思っているのである。クリスマスについてこのような否定的な見解を持つスクルージに対してフレッドはクリスマスについての自分の考えを述べる。

> “. . . . I am sure I have always thought of Christmas time, when it has come round—apart from the veneration due to its sacred name and origin, if anything belonging to it can be apart from that—as a good time; a kind, forgiving, charitable, pleasant time; the only time I know of, in the long calendar of the year, when men and women seem by one consent to open their shut-up hearts freely, and to think of people below them as if they really were fellow-passengers to the grave, and not another race of creatures bound on other journeys. And therefore, uncle, though it has never put a scrap of gold or silver in my pocket, I believe that it *has* done me good, and *will* do me good; and I say, God bless it!” (Stave 1, p. 10)

フレッドはクリスマスは「すばらしい時」(a good time)であると考えており、スクルージの考えと正反対である。フレッドによればクリスマスは「親切な気持ちで、人を赦してやりたくなり、善意が充ちてくる、心楽しい時期」(a kind, forgiving, charitable, pleasant time)であり、一年の中でも一番大切な時期なのである。人に対して「親切な」(kind)気持ちで接し、人を責めるのではなく「赦してやる」(forgiving)という態度を示し、困っている人に対しては「情け深くなる」(charitable)心を持つことが必要であるとフレッドは考える。またクリスマスの時期に人にやさしくなることができれば互いに「心楽しい」(pleasant)すばらしい時を過ごすことができるとフレッドは考える。

ここでは“kind”、“forgiving”、“charitable”、“pleasant”という語に注目しておきたい。フレッドの口を通して語られたこれらの言葉は、いわゆるディケンズの考えるクリスマスの精神を反映したものであり、スクルージのこれまでの人生には全く無縁の言葉であった。

クリスマスの精神と対極の位置にあるスクルージの冷たい心は、社会的弱者救済の為に寄付金を依頼するためにスクル

ージのところへやって来た二人の紳士たちに接した時のスクルージの態度にはっきりと読み取れる。

> "I wish to be left alone," said Scrooge. "Since you ask me what I wish, gentlemen, that is my answer. I don't make merry myself at Christmas and I can't afford to make idle people merry. I help to support the establishments I have mentioned—they cost enough; and those who are badly off must go there."
>
> "Many can't go there; and many would rather die."
>
> "If they would rather die," said Scrooge, "they had better do it, and decrease the surplus population. Besides—excuse me—I don't know that."
>
> "But you might know it," observed the gentleman.
>
> "It's not my business," Scrooge returned. "It's enough for a man to understand his own business, and not to interfere with other people's. Mine occupies me constantly. Good afternoon, gentlemen!" (Stave 1, p. 12)

スクルージはお金に困っているような人物ではない。それどころか金持ちの人間と言ってもよいであろう。何の不自由もなく暮らしているスクルージであるが、貧しい人たちへの寄付に関してはまったく関心を持っていない。彼は貧しい人たちのことを「怠け者」(idle people)であると考えている。貧しいがゆえに死にたいと思っている人間は死ねばよい、そうすれば「余計な人口」(the surplus population)が減ってちょうどよい、というのがスクルージの考えである。彼のこの考えは非人間的な考え方であり、許されるものではない。いかなる人間も一人ひとりは尊い存在であるからだ。

人間のあるべき姿、理想的な姿は、フレッドの口を通して語られた"kind"、"forgiving"、"charitable"、"pleasant"の語が表しているクリスマスの精神をわきまえた人間の姿と言ってよいであろう。故に、スクルージの強欲で自己中心的な考えは、クリスマスの精神から全くかけ離れたものである。

４．過去のクリスマスの精霊が見せる場面

強欲で冷酷なスクルージではあるが、いつ頃から現在の非人間的な人物になってしまったのであろうか。過去の精霊が見せてくれたスクルージの年季奉公人の時代の姿を見てみよう。

> Old Fezziwig laid down his pen, and looked up at the clock, which pointed to the hour of seven. He rubbed his hands; adjusted his capacious waistcoat; laughed all over himself, from his shoes to his organ of benevolence; and called out in a comfortable, oily, rich, fat, jovial voice:
>
> "Yo ho, there! Ebenezer! Dick!"
>
> Scrooge's former self, now grown a young man, came briskly in, accompanied by his fellow-'prentice.
>
> "Dick Wilkins, to be sure!" said Scrooge to the Ghost. "Bless me, yes. There he is. He was very much attached to me, was Dick. Poor Dick! Dear, dear!"
>
> "Yo ho, my boys!" said Fezziwig. "No more work to-night. Christmas Eve, Dick. Christmas, Ebenezer! Let's have the shutters up," cried old Fezziwig, with a sharp clap of his hands, "before a man can say Jack Robinson!" (Stave 2, pp. 30-31)

スクルージは若い頃、フェジウィッグ老人(Old Fezziwig)のところで住み込みの年季奉公人として働いていた。クリスマスの前夜、フェジウィッグ老人はスクルージや他の年季奉公人にクリスマスのお祝いの準備をさせる。いつもは夜遅くまでスクルージたちは仕事をしていたことであろう。「今夜は仕事はなしだ。クリスマスだよ」(No more work to-night. Christmas Eve, . . .)という老フェジウィッグの言葉から彼の使用人たちに対する思いやりの心を感じ取ることができる。スクルージたちは楽しいクリスマスのひとときを過ごすのである。この時のスクルージは皆とクリスマスを楽しむことのできるごく普通の人間であった。

スクルージの青年時代に目を向けてみよう。スクルージには恋人のベル(Bell)ができる。二人は貧しいながらも将来の幸福な生活を思い描いていた。ところが次第にスクルージの心に変化が生じてくる。スクルージとベルの会話からこのことは明らかである。

> "Our contract is an old one. It was made when we were both poor and content to be so, until, in good season, we could improve our worldly fortune by our patient industry. You *are* changed. When it was made, you were another man."
>
> "I was a boy," he said impatiently.
>
> "Your own feeling tells you that you were not what you are," she returned. "I am. That which promised happiness when we were one in heart, is fraught with misery now that we are two. How often and how keenly I have thought of this, I will not say. It is enough that I *have* thought of it, and can release you." (Stave 2, p. 34)

スクルージの心の変化の主な原因はお金であった。彼は小さい頃から貧しい家庭で育てられ、貧困の苦しみを体験してきた。お金がなければ人並みの生活はできないという思いが強かったのであろう。ベルと恋仲になって次第にお金に対する執着心が強くなっていく。異常なほどにお金に関心を抱くスクルージに対して、ベルはスクルージの心の変化に気づく。「あなたは変わりました」（You *are* changed.)という言葉を残して、ベルはスクルージと別れることになる。青年時代に金銭欲にとりつかれたスクルージは、以後今日に至るまでこの欲望は衰えることなく、一層大きくなっていくのである。

５．現在のクリスマスの精霊が見せる場面

現在のクリスマスの精霊がスクルージに見せた様々な場面から一部をとり上げる。次の引用場面は通りに面したある果物店の中の様子である。

> The poulterers' shops were still half open, and the fruiterers' were radiant in their glory. There were great, round, pot-bellied baskets of chestnuts, shaped like the waistcoats of jolly old gentlemen, lolling at the doors, and tumbling out into the street in their apoplectic opulence. There were ruddy, brown-faced, broad-girthed Spanish Onions, shining in the fatness of their growth like Spanish Friars, and winking from their shelves in wanton slyness at the girls as they went by, and glanced demurely at the hung-up mistletoe. There were pears and apples, clustered high in blooming pyramids; there were bunches of grapes, made in the shopkeepers' benevolence to dangle from conspicuous hooks, that people's mouths might water gratis as they passed; there were piles of filberts, mossy and brown, recalling, in their fragrance, ancient walks among the woods, and pleasant shufflings ankle deep through withered leaves; there were Norfolk Biffins, squab and swarthy, setting off the yellow of the oranges and lemons, and, in the great compactness of their juicy persons, urgently entreating and beseeching to be carried home in paper bags and eaten after dinner. (Stave 3, p. 41)

店の中のほとんどの商品がアニミスティックな表現で描写されている。「陽気な老紳士のチョッキのような形をした、大きな丸い太鼓腹の栗を盛った籠」(great, round, pot-bellied baskets of chestnuts, shaped like the waistcoats of jolly old gentlemen)が、戸口にもたせかけてある。「籠の中に盛りすぎたために溢れこぼれて卒中をおこしたように通りに転がり出ている」(tumbling out into the street in their apoplectic opulence)といった栗もあった。「スペイン種の玉葱」(Spanish Onions)を「スペインの坊さん」(Spanish Friars)に喩えた比喩表現も注目に値する。スペイン種の玉葱はさらに、「通りすがりの娘たちに棚の上から浮気っぽい、ずるそうなウィンクをする」(winking from their shelves in wanton slyness at the girls as they went by)とか、「吊るしてあるヤドリギをとぼけ顔してちらりと見る」(glanced demurely at the hung-up mistletoe)といったアニミスティックな表現で描写されている。「ノーフォーク産のリンゴ」(Norfolk Biffins)は、「どうか紙袋に入れてお持ち帰りの上、食後に食べてくださいと熱心に頼んでいる」(urgently entreating and beseeching to be carried home in paper bags and eaten after dinner)というアニミスティックな表現で描かれている。果物店の栗、玉葱、リンゴがディケンズに特有なアニミスティックな表現[4]で描写されることによって、ユーモラスな雰囲気やクリスマス・シーズンの活気に満ちた雰囲気が生まれていると同時に、人に嫌われているスクルージの孤独な姿が浮かび上がってくる。

次にスクルージの甥フレッドの家の中で皆がゲームをしている様子を見てみよう。

> It was a Game called Yes and No, where Scrooge's nephew had to think of something, and the rest must find out what; he only answering to their questions yes or no, as the case was. The brisk fire of questioning to which he was exposed, elicited from him that he was thinking of an animal, a live animal, rather a disagreeable animal, a savage animal, an animal that growled and grunted sometimes, and talked sometimes, and lived in London, and walked about the streets, and wasn't made a show of, and wasn't led by anybody, and didn't live in a menagerie, and was never killed in a market, and was not a horse, or an ass, or a cow, or a bull, or a tiger, or a dog, or a pig, or a cat, or a bear. At every fresh question that was put to him, this nephew burst into a fresh roar of laughter; and was so inexpressibly tickled, that he was obliged to get up off the sofa and stamp. At last the plump sister, falling into a similar state, cried out:
>
> "I have found it out! I know what it is, Fred! I know what it is!"
>
> "What is it?" cried Fred.
>
> "It's your Uncle Scro-o-o-o-oge!" (Stave 3, p. 55)

フレッドの家では彼の家族や友人たちがゲームなどをして楽しく時を過ごしている。ここで注意しておきたいことは、ゲームの中でスクルージが笑いの対象とされている点である。スクルージはフレッドの伯父であるが、フレッドの家族との交流はもちろんのこと、あらゆる人間との交流を避けており、孤独な人生を送っている。たとえクリスマスの季節であっても、フレッド一家との交流は経済的な面で何のプラスにもならないとスクルージは考えているからである。スクルージは金儲け以外のことには全く関わりを持たない人間である。

クリスマスの晩を楽しく過ごすフレッド一家のにぎやかな姿と対照的に、自分の殻に閉じこもって自らの利益のみを追い求めるスクルージの孤独な姿がここでも浮かび上がってくる。現在のスクルージに欠落している周りの人との交流、協調性、絆の持つ重要性をディケンズは我々読者に伝えたかったと言える。

現在のクリスマスの精霊は最後に自分の足元にいる二人の子どもたちの姿をスクルージに見せる。二人の子どもたちは男の子と女の子で、どちらの顔にも子どもらしい本来のみずみずしい表情はみられない。

> From the foldings of its robe, it brought two children; wretched, abject, frightful, hideous, miserable. They knelt down at its feet, and clung upon the outside of its garment.
>
> "Oh, Man! look here. Look, look, down here!" exclaimed the Ghost.
>
> They were a boy and girl. Yellow, meagre, ragged, scowling, wolfish; but prostrate, too, in their humility. Where graceful youth should have filled their features out, and touched them with its freshest tints, a stale and shriveled hand, like that of age, had pinched, and twisted them, and pulled them into shreds. Where angels might have sat enthroned, devils lurked, and glared out menacing. No change, no degradation, no perversion of humanity, in any grade, through all the mysteries of wonderful creation, has monsters half so horrible and dread. (Stave 3, p. 56)

子どもたちの様子は「惨めな、浅ましい、恐ろしい、ぞっとするような、悲惨な」(wretched, abject, frightful, hideous, miserable)という語で描写されている。二人の子どもたちは「膚が黄色で、痩せこけ、ぼろぼろの衣服をまとい、にらみつけるような顔をし、貪欲そう」(Yellow, meagre, ragged, scowling, wolfish)な表情をしており、子どもらしい本来の姿から全くかけ離れたものである。

スクルージは二人の子どもたちに関する情報を精霊に求める。スクルージの求めに対して、精霊は次のように答える。

> "Spirit! are they yours?" Scrooge could say no more.
>
> "They are Man's," said the Spirit, looking down upon them. "And they cling to me, appealing from their fathers. This boy is Ignorance. This girl is Want. Beware them both, and all of their degree, but most of all beware this boy, for on his brow I see that written which is Doom, unless the writing be erased. Deny it!" cried the Spirit, stretching out its hand towards the city. "Slander those who tell it ye! Admit it for your factious purposes, and make it worse. And bide the end!" (Stave 3, p. 57)

男の子の名は「無知」(Ignorance)で、女の子の名は「欠乏」(Want)である。子どもたちの名前が示すように、当時の子どもたちは満足に学校教育も受けておらず、生きていくうえで必要な食事や衣服も十分に与えられていなっかたという実情を反映していると言ってよい。このような子どもたちを生み出したイギリス社会に対するディケンズの批判的な考えを読み取ることができる。子どもたちの現状の姿を「運命」(Doom)という一言で片付けても現状解決にはつながらないというディケンズの厳しい社会批判の気持ちがこの場面には込められている。

おそらくこれまでの自己中心的で強欲なスクルージは子どもたちの悲惨な状況は「運命」だから仕方がないと考えていたに違いない。この観点からすれば、悲惨な子どもたちを生み出した現状に対してはスクルージも社会的責任の一端を負うべきであるというディケンズの批判的な気持ちを読み取ることができる。

６．未来のクリスマスの精霊が見せる場面

未来のクリスマスの精霊はスクルージの将来の姿を暗示する場面を見せる。次の引用文は、ある評判の悪い男の死を話題にして街の人たちが話し合っているところである。

> The Spirit stopped beside one little knot of business men. Observing that the hand was pointed to them, Scrooge advanced to listen to their talk.
>
> "No," said a great fat man with a monstrous chin, "I don't know much about it, either way. I only know he's dead."

"When did he die?" inquired another.

"Last night, I believe."

"Why, what was the matter with him?" asked a third, taking a vast quantity of snuff out of a very large snuff-box. "I thought he'd never die."

"God knows," said the first, with a yawn.

"What has he done with his money?" asked a red-faced gentleman with a pendulous excrescence on the end of his nose, that shook like the gills of a turkey-cock.

"I haven't heard," said the man with the large chin, yawning again. "Left it to his company, perhaps. He hasn't left it to *me*. That's all I know."

This pleasantry was received with a general laugh.

"It's likely to be a very cheap funeral," said the same speaker; "for upon my life I don't know of anybody to go to it. Suppose we make up a party and volunteer?"

"I don't mind going if a lunch is provided," observed the gentleman with the excrescence on his nose. "But I must be fed, if I make one."

Another laugh. (Stave 4, p. 59)

ある男性の死を話題にしているにもかかわらず、街の人たちは誰一人として悲しんでいる者はいない。それどころか人の死を話題にするには最も不自然な態度、例えば"yawn"や"laugh"という言葉が示すように「あくび」をしながら話すとか、「笑い」ながら話すという態度である。男は生前中は誰にも慕われず、誰からも信頼されず、誰からも感謝されることのない人物であったと言えよう。死んだ男は非常に評判のよくない人物であったということは明白であるが、ここでは死んだ男の正体はまだ明らかにされてはいない。

未来のクリスマスの精霊は次に破産寸前に陥っている夫婦の会話の場面を見せる。

"Is it good?" she said, "or bad?"—to help him.

"Bad," he answered.

"We are quite ruined?"

"No. There is hope yet, Caroline."

"If *he* relents," she said, amazed, "there is! Nothing is past hope, if such a miracle has happened."

"He is past relenting," said her husband. "He is dead."

She was a mild and patient creature if her face spoke truth; but she was thankful in her soul to hear it, and she said so, with clasped hands. She prayed forgiveness the next moment, and was sorry; but the first was the emotion of her heart. (Stave 4, p. 66)

夫はある人物から借金をしていたようである。夫には期限までに借金を返済する目処が立っていない。今の状態では破産に追い込まれてしまうところまで来ている。夫婦の会話から債権者は冷酷無比の男であることが窺える。夫は妻に債権者は死んだということを知らせる。その知らせを聞いた時の妻の反応は次のようであった。「彼女はそれを聞いた時、心の中でありがたいと思い、両手を固く握りしめたまま、そう口に出した」(she was thankful in her soul to hear it, and she said so, with clasped hands). ある男の死によって幸福になった夫婦の姿をここに読み取ることができる。

先ほどの街の人たちが話題にしていたある男の死と、この夫婦の会話で話題になっている債権者の死の場面から、死んだ人物は同一人物であることが徐々にわかってくる。いずれの場面においても、男の死を悲しむ者の姿は見られず、皆が安堵感を覚え、幸福になったということが理解できる。

次の場面はボブ・クラチット一家の様子を描写しているところである。

". . . . But however and whenever we part from one another, I am sure we shall none of us forget poor Tiny Tim—shall we—or this first parting that there was among us?"

"Never, father!" cried they all.

"And I know," said Bob, "I know, my dears, that when we recollect how patient and how mild he was; although he was a little, little child; we shall not quarrel easily among ourselves, and forget poor Tiny Tim in doing it."

"No, never, father!" they all cried again.

"I am very happy," said little Bob, "I am very happy!" (Stave 4, pp. 68-69)

会話文からティム坊やが亡くなったということがわかる。当然のことではあるが、一家は深い悲しみに沈んでいる。「あのティム坊やを忘れる者はいないと思ってるよ」(I am sure we shall none of us forget poor Tiny Tim)というボブのせりふから、一家がいかにティムを大切にしてきたかということが理解できる。ティム坊やの死に接して彼に深い哀悼の意を示すと同時に、一層家族の絆を強めるボブ一家の姿から、「余分な人口」は存在しない、人間は誰であれ一人ひとり尊い存在であるというディケンズのメッセージを感じ取ることができる。

ボブ一家はティム坊やのあまりにも早い死に家族全員が胸

を痛めると同時に、ティム坊やの死を無駄にしないようにこれまで以上に家族全員が絆を深めていくことを誓い合う。ティム坊やの死がボブ一家を悲しい気持ちにさせているのとは対照的に、先ほど触れたある男の死は街の人たちの気持ちを、また男から借金をしている夫婦の気持ちを安らかにするのである。

死んだ男の正体を明かすために、精霊は男が埋葬されている墓のところへスクルージを案内する。

> A churchyard. Here, then; the wretched man whose name he had now to learn, lay underneath the ground. It was a worthy place. Walled in by houses; overrun by grass and weeds, the growth of vegetation's death, not life; choked up with too much burying; fat with repleted appetite. A worthy place! (Stave 4, p. 69)

墓は誰にも手入れしてもらったことがなく、見捨てられているという印象を与える。墓の周りには「草や雑草」(grass and weeds)がはびこっている。荒れ果てた墓の中に一体どんな人物が眠っているのであろうか。スクルージは墓石のほうへ近づき、そこに書かれていたのが自分の名前"Ebenezer Scrooge"であることを知る。

スクルージはここである男の死によって幸福感を味わっていた街の人々や、ある夫婦のことを思い出す。ある男の死とはすなわち自分の死のことであったということを、ここで始めてスクルージは悟るのである。

７．おわりに

スクルージはこれまでの自分の生き方を深く反省する。「過去、現在、未来の精霊と共に生きよう」(I will live in the Past, the Present, and the Future!) (Stave 5, p. 71)という言葉の中に改心した後のスクルージの決意を読み取ることができる。[5]

我々の生きる今日の社会情勢は方向感の定まらない、閉塞感が漂う混沌としたものである。人間関係が一層希薄なものとなり、自己中心的な人間が多くなりつつある今日において、『クリスマス・キャロル』に描写されているクリスマスの精神、すなわちフレッドの口を通して語られた"kind"、"forgiving"、"charitable"、"pleasant"(Stave 1, p. 10)という言葉によって表現される精神は、人間らしく生きる一つの指針として、現代社会の我々に大きな意味を持つものであると考える。スクルージはクリスマスの精神と全く無縁な生き方をしてきたために人々から嫌われ、敬遠されて、結果として孤独な人生を余儀なくされてきたのである。スクルージ自身、金に不自由はしていないけれども充実した人生を過ごせなかった。ディケンズはこのようなスクルージ的な人間を作品の中で厳しく批判しているのである。『クリスマス・キャロル』は１９世紀半ばの遠い国イギリスで生まれた作品であるが、この作品に込められたクリスマスの精神は時代を超え、国を超えて、今日の日本の社会においても我々が人間らしい生き方をするためにも十分な現代的意味を持っていると言えよう。

注

1 Deborah A. Thomas, *Dickens and the Short Story* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1982), p. 36.

2 テキストは Charles Dickens, *Christmas Books* (London: Oxford University Press, 1966)を使用した。

3 John Lucas は *The Melancholy Man* (London: Methuen & Co Ltd, 1970), p. 139 の中で、スクルージは"the horror of isolation"のイメージがあることを指摘している。

4 G. L. Brook は *The Language of Dickens* (London: Andre Deutsch, 1970), p. 35 の中で"One of Dickens's favourite devices is the attribution of human emotions and powers to inanimate objects or to non-human living creatures."と述べているように、アニミスティックな表現をディケンズに特有な表現として捉えている。

5 Edgar Johnson はスクルージの改心について、*Charles Dickens: His Tragedy and Triumph* (Boston: Little, Brown & Company, 1952), Vol. 1, p. 487 の中で、"Scrooge's conversion is more than the transformation of a single human being. It is a plea for society itself to undergo a change of heart."と述べている。

（提出日　平成 23 年 12 月 26 日）